緑爽会会報　No. 171

2020年12月25日発行
日本山岳会　緑爽会
発行人　富澤克禮

デザイン・制作　関塚貞亨

〜〜《報告》〜〜〜

緑爽会創立２５周年記念講演会報告

「日本山岳会エベレスト隊初登頂から５０年　その時エベレストで何が起こっていたか」

開催日：１０月２４日（土）１４時〜　　講師：神﨑忠男会員
会　場：武蔵境駅北口「武蔵野スイングホール」
出席者：緑爽会会員２１名　その他日本山岳会会員４０名　一般申込５８名　合計１１９名

創立２５周年記念となる講演会については昨年からテーマをどうするかなど検討してきたが、２月の例会の後はコロナウイルスの関係で、開催自体が出来るかどうか危ぶまれた。テーマはいくつか案があったが、エベレスト登頂から５０年の節目であるにも関わらず、コロナ禍でことごとく関連イベントが中止になっており、エベレストをテーマとすることは大変意味があると考えられた。神﨑忠男会員が快く講師を引き受けてくださり、資料や映像も充実したものを作成していただけた。一方、ルームはコロナ対策で使用制限があり、最も広い１０４号室でも１６名しか入れない。それでは全く意味がなく、記念講演としても相応しくない。そこで公共ホールとして武蔵境駅前のスイングホールに打診したところ土曜日に押さえることができ多くの方に来ていただけることになった。ならばと、会報「山」のみならず、マスメディアも活用して広く一般にも告知を行うこととした。会場も制限があり、収容人数の半分が上限であったので、当初は募集人員を８０名とした。ところが１０月に入ると制限が緩和され、最大１４０名まで可能となった。定員オーバーでキャンセル待ち状態であったが、これで申し込みのあった方全員に来ていただけることになった。（今のような状況では開催できないだろう。大変幸運であった。）

ただ何かあったら大変であるので、入口での検温、手の消毒を行い、講演中もマスクを着用するよう依頼しての講演となった。おそらく、それでも参加を躊躇された方が多かったもの

と思われる。前号で紹介した韓国山岳会の曺（チョ）東植さん、あるいは山形の佐藤会員のように周りから参加を止められた方も多かったに違いない。

講演に先立ち、富澤代表から会の紹介と講師紹介も含めた挨拶があり、神﨑会員の講演に移った。

開演前から「テレビに見る今日のエベレスト登山」映像を流し、最近のエベレスト登山の渋滞状況などが映し出された。その後詳細に資料の説明があり、「暗と明」と題する映像が流された。これは１９７０年の日本隊が当初の重苦しい出来事などをはねのけて、ワンチームで登頂に至るフィナーレへの明転を示したもので感動的であった。

一旦休憩の後、神﨑会員とともに仲間として登頂を支えた４名の隊員が壇上に上がり、おひとりずつ担当任務などをお話いただいた。神﨑会員からは、こういう時によく出る質問に、山に関することでなく「どうしたら、半年とか、そんなに休めるんですか？」といった質問があるとの話があった。

神山義明さんは京都大学卒業後、東レに勤務しておられた１９６９年に、大学の先輩から「いま、東京を中心に大きなエベレスト遠征隊の準備が進んでいる。混成隊だから精神的に強い者でないともたない。お前はあつかましいし、お前しかおらん。」と言われたそうだ。よく考え、いい経験にもなるし、やってみようと思って、おそらく１００名以上いたと思われる東京の準備委員にしてもらった。仕事がら合繊を素材としたテント、羽毛服、シュラーフなど装備担当となり、半年ほどその設計などに携わった。翌年の確か１月１日の新聞に隊のメンバーが発表され、自分の名前があってほっとしたが、会社では誰が許可したんや、と問題になった。でも、国を挙げての遠征であり、会社も電話でのやり取りをしているのが判っていたことで、いとも簡単に休めて、給料も賞与も通常に働いているのと同等に扱ってくれた。とてもいい会社です。息子さんがいらっしゃったら東レいいですよ。もっとも今はキツいですが、と会場を沸かせた。

長田正行さんは防衛大学では山岳部。気象関係で隊をサポートできる者との条件を備えていて選ばれた。だが当時は三沢の航空自衛隊に勤務しており、東京へ転勤させてもらうことが必要だったが、異動しても必ず行けるとは限らないわけで、ビクビクしていたそうだ。学術班、気象通信担当ということで、前半はルート工作、後半は気象（天気予報）を行った。気象についていえば５０年前は技術的にも古典的なことで、インド無線気象ファックスを受信できるよう軽い（と言っても４０キロほどもある）受信機を備えた。またオールインディア放送を夕方６時に聞くこと、それに現地での気象観測を柱として天候の予測を行った。

（左から）嵯峨野宏、吉川昭、長田正行、神山義明の各隊員

吉川昭さんは第２次ＲＣＣで活躍していた。遠征の１年半ほど前に槇有恒さんに小西政継さんとともに有楽町のフレンチレストランに呼ばれ、「エベレストに行きたいか。行くならＪＡＣに入らないといけないよ。」と言われ入会した、とのことだった。松坂屋に勤務していた時にすでに４ヶ月ほど休職し、ヨーロッパアルプスのあちこちの壁を登っていたとのことで、ドリュのボナッティ稜での経験を語っていただいた。４ヶ国８人が取りついている中で、２隊は頂上直下１００ｍもない所で宙吊りで死んでいて、イギリス隊と日本隊だけが生還したという。会社には井沼清七と言う元オリンピック選手の常務がいて、スポーツには理解があり、エベレスト行を認めてくれた。吉川さんは南壁（南西壁）ルートで８０５０ｍ到達で終わっている。今はボニントンや群馬県の隊が登ったことになっているが、ＲＣＣの私から言わせてもらうならば、あれはエスケープルートであり、未だに南壁は登られていないと思っている、と述べられた。

嵯峨野宏さんも南壁隊で、今年の『山岳』で神﨑さん、鹿野さんとの鼎談でお話されている方である。山で食っていくというのは大変なことで、植村さんや田部井さん、あるいは三浦雄一郎さんのように、一番でないといけない。吉川さんはあのように言うけれど、左右どちらからでもいいから頂上に行きたかったなと思う。でも、あいつができるんだからということで人に希望を与えた点では満足している、ともおっしゃった。

これを受けて神﨑会員からは、ラグビーではワンチームとか言うが、登山もチームワークが大切。日本隊の成功の要因はチームワークの良さ、それと長田隊員が５月１１日アタックの日を見事に快晴だと予想したことだと話された。

その後、スライドを見ながら、途中南壁ルートの画像では吉川さんからの説明もいただいた。この１９７０年のエベレスト隊の偵察から登頂までの流れが大変よく理解できた。準備の段階から現地でのルート工作が進む過程、一方で、滑落事故や若い隊員の死といった重たい出来事など、色んなドラマがあったこと、またそれを乗り越えて登頂できたことを改めて知る良い機会となった。

資料の詳細説明があったと先に書いたが、神﨑会員が自分で言うのも何だがと話されたように、配付された資料は、エベレストの、また広くヒマラヤの登山史が理解できる力作で、各国の登山隊のこと、特にイギリス隊のことを知っていた方が日本隊のことも理解が深まると話された。（会員にはお送りしているのでぜひ熟読いただきたい）資料の２０ページに日本隊の隊員と日程が出ている。そこに渡部節子隊員がサウスコルに登り、当時の女性の世界最高高度到達となった記録がある。この時に渡部節子さんがもし登頂していたら、登山界の歴史が変わっていたであろうと神﨑会員は語られた。資料には国内の登山界の歴史もまとめられており、神﨑さんの登山界に対する思いが詰まったものになっている。また、ご自分の登山歴を示す中で、「人生と健康」「体力と年齢」等の考え方も示されている。

会場の聴衆は、ウィットに富んだ神﨑さんや４人の隊員の話に引き込まれていたようで、２５周年記念講演会として実りあるものになった。帰られる会員の方々から「良かった」と声をかけていただくなど好評で、講演を聞かれた一般の方から、「会場受付や配付資料など、そこに往時の日本山岳会が持つ雰囲気を強く感じた」とのお礼のハガキが届くなど、開催できて本当に良かったと感じたことであった。加えて、講演を聞いていただいた会員から緑爽会に入会したいとの申し出があり、新入会員をこの最終ページでお知らせ出来ることにもなった。

（荒井正人記、写真撮影：小泉義彦）

１１月山行報告

「田部重治の明治の山旅を捜して晩秋の笹尾根を歩く」

石塚　嘉一

若い田部重治が木暮理太郎と奥高尾から笹尾根を歩いたコースの一部を二人の登山家を思いながらその足跡を探して歩こうと、１１１年後の秋も深まった１１月１２日に緑爽会の７人で浅間峠から日原峠までを歩いた。

田部と木暮は明治４２（１９０９）年５月半ばのある日、浅川町（今の高尾）から小仏峠、景信山、陣馬山を越えて和田峠、三国峠、浅間峠から西原峠へと「甲武国境」の尾根を縦走して、郷原に下り鶴峠から小菅に出て川野に泊まり翌朝雲取山に登っている。このことを以前に田部の『わが山旅五十年』（１９６６年、平凡社、）を読んで、いつか同じ道を辿って歩いてみたいと思っていた。

しかし、彼らがここを１００年以上前に歩いたとしるしが山道に残っているわけではない。当てのないこういう趣向を、おもしろいのではないかと思ってもらえるのが緑爽会。やってみようか、と幹部のみなさんが賛成してくださって実施することになった。

この山行について一番詳しいとされる『山と渓谷』（昭和４年、第一書房）に収められた「甲武国境と雲取山と多摩川」を日本山岳会の図書室（田村さん）のご好意でコピーさせてもらったのを、荒井さんと小林さんはあらためて読んでくださった。１０月に３人で笹尾根を下見して、彼らが野営をしたのはどのあたりかなと推理してみたりしたが、浅間峠に上るのに１時間半、日原峠から檜原街道に下りるのに１時間ちょっとかかるのを考えると、田部と木暮が歩いた尾根の上を実際に歩けるのは１時間余り歩くのがせいぜいだろうとの話になった。以前に何度か歩いた経験から、浅間峠から数馬あたりまで行けるかなと思っていたのだが。

ということで、山行当日、武蔵五日市駅から都民の森行きバスで上川乗へ。登山口で、渡部さん差し入れの小さな焼きおにぎりでエネルギーを供給して、沢のそばの急登を歩き出す。時々休みをはさんで、植林の間を通る朝の木漏れ日が美しい山道を１時間ほど登ると右奥に沢、左側に黄色に染まった広葉樹の、ちょっと平坦になったところに出た。あと少しで浅間峠のところだ。ここで大休止。いろんなおやつを分け合い、紅葉を愛でる。

小林さんは、田部と木暮が飯を炊いて野営をしたのはこのあたりではないかと言うので、私もそう思うと言った。「…少し右の方へ下りて行かれさうに道がついてゐる。それを行ってみようと云ふことで進むと、一寸こんもりした立木があって、下草が柔かく平らである。ここから右の水のある谷へは、餘り遠くも無ささうなので、そこに野営することに決した。」と田部は書いているが、それがこのあたりによく似ている。

浅間峠の大木をバックに

（しかし、木暮は『山の想い出』（１９９９年、平凡社）の中で同じ山旅のことについて、「途中栗坂峠附近で野営し...」と書いている。これだと、浅間峠に出る前、熊倉山寄りになる。）

予定どおり登山口から１時間半ほどで東屋のある浅間峠に着いた。ここには、和田峠からの尾根道のほかに、檜原村と山梨側をつなぐ道が上野原の方から上がってきている。２本の大木の前で全

員の写真を撮った。樹齢１００年は超えていそうだ。田部と木暮はこの巨樹のもとで休んだかもしれない。連行山を越え、野営によさそうな場所を捜しながら歩いてきて午後４時前に、この浅間峠あたりに来ている。この大木のうしろに祠があるが明治２６年と裏に記してあった。

ここから笹尾根の道に入って日原峠に向かって進む。この道は「関東ふれあいの道」になっている。ゆるいアップダウンを繰り返しながら笹尾根を少しずつ登る感じで進む。右側の雑木の間から、独特の形の大岳山が見えて、しばらく行くと、その左にどっしりした御前山も見えた。さらに行くと尾根の左向こうに権現山の姿も見える。田部と木暮が歩いたときに「左の方には...権現山が高く聳え、前面には大嶽、御前、三頭の山々がひどく立派に聳えている」（「甲武国境と雲取山と多摩川」）のを見たのと同じ景色をいま見ているのだと思って嬉しくなった。これだけでも、今回、笹尾根を歩いた甲斐があった。

美しく色づいた木々の前で時々立ち止まりながら、浅間峠から１時間ばかり歩いたところの陽だまりで昼食にした。ちょっと開けた鞍部で、弁当を広げたところにちょうど日が差して、山日和の日が暖かい。木々の向こうに権現山が聳えている。風もないのに枯れ葉が思い出したようにひらひらと落ちてくる。中村さんが画材を取り出してスケッチを始めた。それぞれの秋をしっかり味わったあとで、また、落ち葉を踏み分け、しばらく行くと日原峠だ。赤い布がかかった石仏がある。昔から人が行き来した峠だとわかる。標識に（左）上野原町猪丸、（右）桧原村と示している。田部はこの笹尾根を歩いた１０年後に、檜原村人里から日原峠に上って標識どおり猪丸に下りて上野原駅から汽車に乗っているのである。（第一書房版『山と渓谷』の「秋川の上流」）今ではそんなに通る人はいないに違いない。「日原峠９００米」の標識は日本山岳耐久レースのコース上であることも示している。

これら新旧２つの標識の前で全員で写真を撮って、尾根の右にある「人里・笛吹」（へんぼり・うずしき、とふり仮名がついている）の標識のところを人里めざして、針葉樹の落ち葉でふわふわの道を下る。１０分も下ったところに水場があって左の植林の間から勢いよく水が出ている。（山と高原地図にも水場の印がついている。）「甲武国境と雲取山と多摩川」」に「（朝飯のあと）国境まで戻って、少し進むと、路傍に水が滾々と湧き出しているところがあるので、昨日はここまで来ればよかったにと後悔する」というくだりがあるが、これがそのことなのかはわからない。ほかには水の湧き出しているところはないのだが。

１時間余りで南秋川の橋を渡って檜原街道に出た。一日中、誰にも会わなかった。人里のバス停よりもだいぶ下流の「人里休暇村」の前あたりで数馬からのバスを待った。笹尾根歩きの続きを思いながらバスに乗り込んで帰路についた。　（写真撮影：石塚嘉一）

参加者：7 名（渡部温子、鳥橋祥子、辻橋明子、中村好至惠、荒井正人、小林敏博、石塚嘉一）
行程：武蔵五日市駅 8：22⇒上川乗→登山口 9：10→浅間峠 10：45→鞍部で昼食 11：45-12：20
→日原峠 12：55→檜原街道・人里地区 14：20

「田部重治の足跡を辿る」～笹尾根を歩く～

中村　好至惠

久しぶりに緑爽会の活動（山行）に参加しました。行く先は大好きな笹尾根です。リーダーの石塚さん、小林さん、そして荒井さんは先に下見山行をしてくださっていましたが、季節がひと月たった１１月中旬の当日は、南秋川沿いや山中の紅葉はちょうど見頃になっており、樹林越しの見通しもよくなっていました。

集合の武蔵五日市駅から西東京バスに４０分ほど揺られ、上川乗バス停下車、そこからまずは浅間峠を目指します。

さて、始めは植林帯だった登山道も登るにつれ笹尾根らしい自然林となり、秋の色合いが目を楽しませてくれます。曇天だった空からも時折日差しがもれ、静かな貸し切りの山を包みます。尾根に近づく頃には、「この辺り、田部重治は縦走路を辿って行ったのかね～」などと話ながら、まもなく浅間峠着。小広い所に東屋や石祠、大きな御神木の杉などがある峠らしい場所ですが、周囲は樹木が大きく育ってしまい眺望はありません。

休憩後には、本日メインのプロムナード、笹尾根の稜線歩きが始まります。そこはかつて田部と木暮が歩いた縦走コースのほんの一部ですが、何処かには“一寸こんもりした立木があって、下草が柔らかく平らである”という野営した場所もあるはずで、紅葉を味わいながら歩を進めました。途中には右手（北側）に、明治期の二人も目にしたであろう大岳山がくっきりと見え、縦走路の楽しみとなりました。当時は樹林もさほどなく、もっと見晴らしが良かったのではないか…などと想像しつつ進みます。

山中では「三密」も無縁、誰にも会わず、往復の交通機関を除けばコロナ禍を忘れさせてくれるひとときです。お昼は次なる日原峠手前に、なんとも気分のいい陽の当たる開けた鞍部があり、異口同音「ここ、いい所ですね」とそれぞれ腰をおろしました。秋という季節にゆったりと浸るような、とてもいい山の時間が過ぎていきました。

昼食後、再び稜線をしばらく行くと割に早く当日の下山ポイントである日原峠に到着。そこで記念写真をし、しばし歓談後、ちょっと暗い植林帯の下山路に入ります。下見をしてくださっていたリーダー達から、「５分ほど下ると、こんな植林地なのに突然水がスゴイ勢いで出ている場所がある」と教えてもらっていました。殺風景で単調なこの杉植林と湧き出る水のイメージがあまりにも食い違い、にわかには信じられませんでしたが、しばらく行くと立派な水場に出くわしました。細めの管から流れ出る水、その時でさえ充分な水量でしたが、下見のときにはもっと水勢が激しかったとのこと。

田部と木暮が野営した場所から「…右の水のある谷へは、余り遠くも無さそうなので…」と思ったらしいのが、実際は「水のあるところまでは、二三百尺も雑木を分けて下らなければならなかった」とあります。皆で「ここがその水場だったんでしょうねー」と言い合い、雑木と植林の違いはあるにしても、不思議な場所の見事な水場の確認も出来たのでした。

あとの下山は消化試合的な一気の下りでしたが、全員無事に南秋川の小さな鉄製の橋を渡り、無事檜原街道に降り立ちました。人里休暇村付近にてバスを待ち（この辺りは自由乗降区間）手を上げてやってきたバスを停めて帰路の車中の人となりました。リーダー始め、当日ご参加の皆様、どうもありがとうございました。

＜緑爽会創立２５周年特別企画＞創設時からずっと在籍の会員にご寄稿いただきました。

創立２５年に思う

梨羽　時春

今年で緑爽会創立２５周年という。年月は早いもので、私も８１歳になった。

私は日本山岳会自然保護委員を命じられて、故・中村純二氏の指導を受け、秋田県庁での青秋林道反対の会議に同行したことが忘れられません。今年の１１月１日の告別式に参列し、今までお世話になったことを感謝しました。

さて、緑爽会入会は、時の流れで自然に入れていただきました。しかし、皆さんの年齢が高かったので、私としては、この会は山に登るより山の知識を広める会にしたいと思いました。

山の会で「和」とか「平和」とかいう語がよく出て来るが、若い時は月給や有給休暇を全て使った経験を持つ人たちが、年齢とともにおだやかになり、現在に至ったのであろうか。

もう一人感謝したいのは、故・国見利夫氏です。いろいろ指導してくださいました。特に、山岳部でヒマラヤに行く時には、岸記念体育館内にある日山協か、都岳連の事務局にいろいろ手続きをしなければならない。その事務局に国見さんがいらっしゃったおかげで書類の手続きは無事に出来た。本当にありがとう。感謝です。

最後の感謝は緑爽会の役員の方々です。代表・富澤克禮、副代表・夏原寿一、会計・渡邊貞信、会報・荒井正人さん/小林敏博さん達です。控えめで、積極的で、山行の回数で、思いやりで、まだまだありますが、私はこの五名の方々に感謝したいと思います。

緑爽会創立２５年に思う

松本　恒廣

私が山岳会に入会したのは１９７２（昭和４７）年、赴任先の関西であった。その後東京に戻った８１（昭和５６）年に自然保護委員会に入会した。そして思いがけず関塚さんからのご指名で、後任として担当理事を引き受けることになった。当時の会長は山田二郎氏で、村木、藤平両副会長（ご三方とも後に名誉会員）という布陣であった。

世は開発ブームで、至るところで賛成反対の騒ぎが持ち上がっていた。ご多分に洩れず私もこれらの問題に直面することになった。先ずは志賀高原岩菅山を開発しての長野冬季五輪スキー滑降コース計画と、鳥海山開発計画であった。これに対する反対の声は賛成派を押し切り、最終的に前者は既存の八方尾根を利用することになり、後者は地元山形支部の佐藤淳志会員等の努力で７年目に西武開発に白旗を揚げさせて終息した。私が理事を担当しているこの間に委員会の人数は４０名近くになった。来る者は拒まずの姿勢に終始したので、ついに常務理事から縮小指示が出て、次の担当理事、大森さんは大ナタをふるって９５（平成７）年には１４名に縮小された。

この時点で委員会を辞めざるを得なかったメンバーで渡辺正臣氏を中心に結成したのが緑爽会であった。渡辺氏（２２８１）は風見武秀氏の下で山岳写真を学び、日本ハイキング倶楽部の代表をつとめ、他方執筆したガイドブックは５００万部にも及ぶという。渡辺氏の呼びかけに応じた３０名中、現在当会で健在なのは、梨羽時春、松本恒廣、近藤緑、関塚貞亨、渡部温子の５名だけとなって、大部分の方が鬼籍に入られた。緑爽会が旗揚げしたのは９５（平成７）年９月で、以来２５年を経過したことになる。この間毎月軽い山行や諸行事を続けてきたが、私なりに印象深いのは、上高地での自然保護委員会４０周年記念集会。山岳画家茨木猪之吉について。今西、深田、山崎三

氏をめぐる鼎談。「静かなる山」とその仲間（中西、山口、横山)。「劔岳点の記」をめぐる座談会。高橋健治とローゼ夫人を語る。等々・・。

私が緑爽会に関わっていた時、私を助けてくれた一人が宮下啓三氏（５５４６）であった。彼とは７５年前からの友である。慶応大学文学部名誉教授（独文)、山岳会としても得意の語学力を活かして山岳文献の書評等をこなしていた。当会にも直ぐ入会してくれ、毎年のように語ってくれた。「アルプスの山の娘ハイジの話あれこれ」（０６年２月)、「大島亮吉と深田久弥の残した大きな功績と小さな罪」（０８年２月)、「日本と欧州の比較山岳談義」（１０年２月)、「ラスキンについて」（１１年２月)、そして１２（平成２４）年２月１６日の「増えた山の名、消えた山の名」が彼の最後の談話であった。この時、すでに彼の身体は胆管がんに冒されていたのだ。今度の緑爽会が僕の最後の話になるだろうと言っていたが、それから間もなく５月６日、彼は旅立ってしまった。

なお「山と溪谷」１２（平成２４）年８月号に、２頁にわたる私の拙い追悼文が掲載されている。

逝ってしまった仲間たち

近藤　緑

手元の緑爽会々員名簿欄外にある物故会員の名前を見ると、「みんな逝ってしまった」と長生きした身の悲哀に沈む。その全ての人々が、途中退会した為に記載されない何人かも含めて、共に緑爽会に集い伝統のクラブライフを楽しんだ仲間たちだった。

写真家の**渡辺正臣**さんが、自然保護委員会から分離独立した緑爽会の生みの親といえる。
弟子の渡部温子さんが、今もその志をついで頑張って下さっているのは有難い。正臣さんはガイドブックの執筆者でもあった。発行部数５００万部を突破した祝賀パーティで、劇作家の内村直也氏から「５００万部って本当か？」と囁かれた。いくら売れっ子でも、戯曲では想像外の部数だったろう。正臣さんはかつて菅原電気の社員だった。経営者で演出家の菅原卓・劇作家の内村直也兄弟をもってしても、登山ブームを背景にしたガイドブックの売行きに及ばなかった。

織内信彦氏は何となく態度が尊大で、下町育ちの私の夫（近藤信行）とはソリが合わなかった。その裏には「余人ヲ以テ替エ難シ」と言われて農大ツィンズ峰遠征隊長を降りた織内氏の食糧公団理事という役職が、夫には戦後飢えた時代の記憶に重なった為かと思われる。その反目が影響して、織内氏は私にも心を開かなかった。織内氏に代わって後輩の宮澤憲氏が隊長をつとめたが、この遠征は失敗に終わった。憲氏の夫人が宮澤美渚子さん。織内氏は宮澤夫妻の仲人だった。心やさしい美渚子さんの仲立ちで晩年の織内さんが入所された養老施設に一緒にお見舞いに行くようになった。死ぬまで毅然とした氏の態度は変らなかった。

南極探検で勇名を馳せた**村山雅美**氏は豪放無頼の人であった。初めて緑爽会に顔を出された時に「緑爽会ってぇのは緑さんの会かい？」と大きな声で言われて、居並ぶ諸先輩の前で私は動転した。

西堀栄三郎（元会長・第Ｉ次南極観測隊々長）氏は才覚の人であった。未知の氷の大地に臨むのに最も適した人間は、厳寒の山で鍛えた山男の中から選ぶと決め、旧制松本高校時代から勇名を馳せた村山雅美に目をつけた。南極探検という国家的事業に参加させるには国家公務員でなければならない。当時の村山は夫人の実家が経営する甲斐絹を扱う貿易会社に勤務していた。勤務地が富士吉田と聞けば、その勤務ぶりも想像がつくというもの。そこで急遽横浜国大に転職させた。「おじさまが、何を教えるの？」と、身内は大笑いしたという。この話を私は永い付合いの山中泰子さんから聞いた。彼女は村山夫人の姪である。神楽坂にあった「土筆」という飲み屋に集まるジャーナリストや日仏学院の副学長ロベール・ヴィニョさんらで山歩きを楽しむ「土筆山岳会」の事務局を

引き受けていた。村山邸兼所有マンションとも近かったので、その店で団欒の時を持つこともあった。村山夫人は、家業をついで多忙だったからＪＡＣに深入りする時間はなかった。南極野郎も家庭ではそれなりに自分の居場所を心得ていた。子どもがそのまま大人になったかのような人柄が母性本能をくすぐるのか、女性には人気があった。ヒマラヤ遠征以来、娘のように可愛がっていたシタール奏者スシュマさんや、ＪＡＣのマドンナ的存在の早川瑠璃子さんらが、よく身辺の面倒を見ていたようだ。

小倉厚さんは農大入学早々、満州の実習農場に送られ、ソ連軍の侵入で九死に一生を得た人だった。著書『凍土の果てに』は、少年たちが南を目指して逃げるが、その殆どが飢えと寒さで死んだという悲惨な記録である。「二人一緒だったから生きて帰れた」という友人が営む酒蔵の「八海山」を、例会の折には差し入れて下さった。

日本山岳会初期の女性会員といえば、黒田初子・村井米子といった名家の生れが多かった。その姿を見かけることはあっても、恐れ多くて近づけなかった。緑爽会の女性では**小原晴子**さんを思い出す。九州の炭坑王・松永安左衛門の姪だけあって、黙って座っていても貴夫人の貫録があった。その彼女が上高地の山研委員だった時には、シーツや枕カバーなどの洗濯物を唐草模様の大風呂敷に纏めて背負い、泥棒のような格好で中央線を往復する姿を覚えている。（註・昔の山研は汚水処理が出来なかった）。その時期、江戸時代から庶民の暮らしを支えた薪炭業だったご主人の生家が傾いて、一時は夫婦してヒマラヤ遠征や女性登山の体験を語るテレビ出演や講演会の謝礼を生活の資としていたと聞く。海を望む逗子のお宅には自給自足の菜園があり、桑の木を植えて蚕から糸を紡ぎ機織りまでされると知って、戦中戦後を逞しく生き抜いた女性の鑑と畏敬の念に打たれた。

続いての貴夫人は、前述の**早川瑠璃子**さん。和服の似合う美しい人だった。私が夫の仕事の関係で山梨の岳人と付き合うようになった際、よく「早川さんは元気ですか」と聞かれた。
戦後の早い時期から登山する美人を多くの人が記憶していた。彼女は「女は女らしく」と指導した坂倉登喜子（エーデルワイス会長・故人）さんの指導にあきたらず、女性だけの登山団体から飛び出した何人かの一人である。彼女の夫君は山梨県生まれ。海のない甲州から難関の海軍兵学校に合格した英才だった。終戦後、スキー場で知り合って結婚したと聞くが、敗戦後の社会で旧軍人の生きて行く道の嶮しかったことは、同じ職業軍人を父にもつ私には想像がつく。彼女は茶道師範として出稽古をしていた。彼女からの電話は、いつも朝早かった。「ご免なさい。うちはこの時間に起きないと回っていかないの」。外出する前に一日分の食事を用意するのだという。そしてＪＡＣでは海外委員会にも属していた。彼女の社交術はそこでも必要とされた。いつも和服姿なので「衣装持ちね」と言うと、そっと耳元で「これ、リサイクルなの。タダ同然よ」と笑顔で答えた。彼女が着れば、古着も高級呉服になった。賢い女性だった。第一高女という当時の名門校の出身。さぞ良家の生れと思ったが、彼女の口から聞いたことはなかった。彼女の実弟が民放ＴＢＳの社長と知ったのは他の人を通してだった。彼女と親しい男性は多かったが、浮いた噂は聞いたことがない，家人を気遣いながら、山岳会の為にも日夜献身する無理がたたったのか、ある朝、忽然として倒れ、そのまま逝ってしまった。未だに早川さんを慕う会員は多い。

その早川さんと親しかった一人が秀才で鳴らした慶大教授・**宮下啓三**さん。独逸文学専攻
の学者だが、絵が上手で、すばやくスケッチする似顔絵が秀逸だった。さっと描きあげて,惜しげなく本人に渡した。「絵描きさんですか？」と驚く人に、私が「絵描きだったらタダでは描かない」と答えたことがある。ＪＡＣレベルの教養に溶け込もうと、彼なりに努力したかと思われる、そのサービス精神には感心した。いったん消えかけた慶応義塾大山岳部を再興、部長として面倒を見て

おられた。病魔に侵されて早世されたが、さぞかし無念だったろう。緑爽会でお願いした最後の講演では、弱った体で椅子から立ち上がって終わるまで腰を下ろすことなく責任を果たされた。自分でこうと決めたことは守り抜く、その誠実さに感動した。死を覚悟して臨んだ彼を、傍らで介助したのも早川さんだった。

最後に**藤本慶光**氏にも触れておきたい。本来なら高野山の房をつぐべき人が、俗界の人となって実業界で出世された。東大「山とスキーの会」からＪＡＣ副会長に迎えられた人。大柄な体躯の上に読経で鍛えた声が大きいので、初めは怖くて近づけなかった。信念の人だったから、「高尾の森づくり」活動（河西誠一郎代表・故人）に苦言を呈して対立したこともあった。「大きな声で恐喝するのか」と叫ぶ河西さんに「いや、これは地声です」と苦笑される一幕も見かけた。私の夫の仕事場は勝沼だったから、秋にはワイン醸造業の古屋学而支部長の庭で新酒まつりが行われた。そんな機会があって、親しくお付合いするようになった。ガンに冒されたと解った時には、親友の宮澤美渚子さんが京都で「免疫療法」の治療を受けて再起したことを伝えると、自身でも関係した本を読んでおられたが、その治療に頼ることはなかった。山仲間の東大系の医師たちのメンツを考えてのことではなかったろうか。この人で忘れられないのは、公益法人化問題を論議する理事会で最後まで反対の態度をとったこと。日本山岳会はあくまで「クラブ」であるべきだと主張して譲らなかった。このことは今なお教訓として心に残っている。だから緑爽会のような同好会を守って行きたいのだ。

その後、私の夫が倒れたとき、お見舞いに高野山の酒粕が届いた。夫は療養のため東京に帰ったので、夏が過ぎて山荘の郵便受けに小包を見つけた時にはトロトロになっていた。あわてて礼状を書こうにも、その時にはご本人が亡くなっていた。わが家の近くに藤本さんが役員をされた会社が建てたマンションがある。その前を通る度に、酒粕のことを思い出す。

もう字数を超えた。緑爽会にはまだまだ個性的な先輩が多くおられた、多様な人たちが、仲良く集うことが出来たのが緑爽会である。今日まで続いた蔭には大御所もさることながら、活動を支えた事務局の力が大きい。いまも事務局に人材が揃っていることは頼もしく嬉しいことである。「緑爽会よ、永遠なれ！」と心からのエールをおくりたい。

素晴しいクラブとなった緑爽会の２５周年を祝う

関塚　貞亨

２０２０年の年末には９５歳９ヶ月になる私には２５年はあっという間に過ぎたように思う。まず２５周年の記念講演者の神﨑忠男さんは４０年来の畏友で緑爽会の入会は嬉しいことであった。会は２５年の間に発展を続け、山岳会の精鋭が揃って素晴しいクラブとなってきたことを祝いたい。

２５年前の発足当時は、元自然保護委員長でガイドブックの権威、緑爽会の名付け親だった渡辺正臣さんも健在で、初代代表の国見さん、未熟な担当理事だった私を助けてくれた国立公園協会の池田さんなど懐かしい人たちが健在だった。私は７０歳で１０年前に南川さんに請われて『山岳』の編集を手伝い、６０代からの１０年間を『山岳』担当理事だった田辺寿さん、芳賀孝郎さんと楽しい時間を過ごしていた。

会発展は会員全ての努力と協力のおかげだが、最初に会報を発行し続けてくれた近藤緑さんの功績は大きい。近藤さんが引退後、会報発行を引き継いだ夏原寿一さん、荒井正人さんのご苦労には深い敬意をささげたい。山岳会が公益法人となってクラブらしさが薄らいでいる現状に代わってクラブ活動をしているのが同好会だが、私はクラブの本道は「会報と名簿の発刊」だと思っているの

で、名簿作成と毎月の企画で会の親睦と発展に貢献した歴代の代表と事務局皆様の活動にも敬意をささげたい。(編注:『緑爽会会報』No.1 の発行は 2002 年 9 月。それまでは“お知らせ”が出されていた。)

またコロナ騒ぎのこの数か月は皆様にお会いできなかったが、この２５年間に隔月の山行と会合を続けられた会員の皆様に感謝している。

私自身の１年を振り返ると、息子夫婦が孫の成人で手狭になったため自宅をこの２月に建て直すことになり、私も２月から狭い１ＤＫのアパートで暮らすことになって、誰にも会わずに４ヶ月が過ぎた６月に洗面所の鏡を見ると、一文字に結んだ唇が薄くなりきつい顔になっていたのに驚き「これはいかん」と反省、懐かしい緑爽会の人々を思い穏やかなほのぼのとした気持ちを持つように心がけて２か月が過ぎた８月に再び鏡を見ると穏やかな顔に戻っていた。皆様に会わなくても会員の皆様を思うだけで穏やかになる。緑爽会の会員の皆様は有難い方々である。幸いなことに１０月から移り住んだ新居は息子夫婦と同棟の広い１ＤＫで快適に過ごしている。

今や会の活動の中心は２１世紀に入会した方々が担っている。最初に書いたように我が会員は山岳会の精鋭の集まりで、会発展の功労者の名前をあげれば紙面が足りない。私の感想を述べれば、新人たちも端倪すべき哲学、思想の持主が揃っている。緑爽会の未来は明るい。コロナ騒ぎが静まり、いよいよ発展することを願っている。

今の私の思い

渡部 温子

現在の緑爽会は、いい会になったと思っています。皆さんが楽しめる方向に変わってきていると感じるのは、私だけではないと思います。

山行の企画も「エッ！」と思う山域だったりして、会報が届くのが楽しみになったことも変化の現れです。チームワークの良さが結果として表れていて、外部から見てもいい会だと思うのでしょう。他の同好会の人から、「緑爽会っていい会ね」と言われて、「どんなところが？」と聞いたら、「皆さん和やかで」と答えてくれました。これほど嬉しいことはありませんでした。

１ 人が計画して采配を振るのではなく、いろいろの案件を５人の世話人全員で検討するチームワークの良さは素晴らしいと思います。チームで下見をしてくれているのも有難いことです。

ルームの入室名簿を見て「今日は発送日だったか」と分かったときや、自主的に発送を手伝いに来てくれている人の名前があったとき、何て良いことだろうと思わずありがとうとつぶやいてしまったこともありました。任せっきりで安心して居られて、私が担当していたときは今のような気配りはなかったと、身の縮む思いをしております。

私は体調の悪かったときに退会を考えたことがありましたが、退会しなくて良かったと思っています。５人が寄って、より良いアイデアが生まれ計画がたてられていると思うと、待つことも楽しみのひとつです。予定が重複しないようにと祈るような昨今です。

今でも関塚さんからは、お叱りを受けることがあります。先日怪我をしたときは、「あなたも年を考えなさい」でした。仲間にこんな温かい一言あるでしょうか。関塚さんとは４０年間、自然保護委員の時から一緒でした。これからもお互いに体に気をつけて緑爽会の例会や行事に参加・出席するようにしていきたいと思います。

～～《寄稿/投稿》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

老人と薪ストーブ

芳賀　孝郎

冬の夜、燃えるストーブを囲んで仲間と語り合うのは楽しい。

２０年前家を改装した時ペチカを取り壊した。暖房施設はセントラルヒーテングに改良した。しかし冬になると、何かが足りないと思った。それは赤々と燃えるストーブがないことであった。そこで集合煙突は残してあったので窓の大きい安価なストーブを購入した。

当初薪は購入した。ナラ材の薪は高価で次にイタヤカエデ材そしてヤチダモ材とランクされる。ナラとカエデ材は良く燃え火持ちが良いことが判った。

一昨年私の庭と市有地（荒井山）との境界の木々が大きくなり我が家の庭に覆うようになった。市に伐採をお願いしたがなかなか来ないので北大山岳部ＯＢの造材所に伐採してもらった。

イタヤカエデ、ミズナラ、白樺、アサダ、栓、朴木等の木は簡単に伐採が出来ない。その理由は、これらの木々は先の方で、長い歳月をかけて山ぶどうやコクワの蔓がからみ合っていたからである。

３月、高所伐採資格を持った作業員が登山のユマールを使用して、上手に木に登り蔦を切断してから伐採が始まった。その作業が面白く一日中眺めていた。あまり面白いので動画を撮った。その作業を見て伐採は高価であることを納得した。

切り倒した木々を薪にする作業は私の仕事である。木材の長さ４０ｃｍに切り薪にする。その為チエンソーを購入した。慣れない手つきで薪切が始まった。ミズナラやイタヤカエデは堅いので時間を要する。木材によりチエンソーの使い方を工夫し覚えた。

薪にするには直径１０ｃｍ以上の木は割らなければならない。スエ―デン製の薪割用の斧を購入した。しかし木は簡単に割れなく悪戦苦闘した。

それを見た近所の友人が電動薪割機を貸してくれた。木も人間と同じように真直ぐのもの、曲がったもの、ねじれたもの等いろいろある。真直ぐに成長した木は良く割れるが、ねじれ木は機械でも簡単に割れない。

ナラやイタヤの堅い木を切ること、割ることも工夫を要し、忍耐が必要であった。薪を作り上げるのに２年の歳月を要した。

老人が４０ｃｍ×２００ｃｍ×８００ｃｍの薪を積み上げた。その時珍しく感動を覚えた。薪割機を貸してくれた友と老人の仕事として薪切、薪割を与えてくれた人に感謝した。

薪の作業はまだ続く、出来上がった薪約１５ｋｇを箱に入れて玄関の階段を一気に１９段上がる。その運動を慎重に３０回くらい繰り返して運び上げる。

運び上げたその薪を入口前に一冬分を積むのである。８５歳の老人にとって厳しい仕事である。薪切、薪割、薪積みの作業が出来るとはまさに健康であるお蔭である。神の感謝している。

１０月中旬、朝夕冷え込んだ時いよいよストーブを燃やすと時がやって来る。丸めた新聞紙を５・６個ストーブの中へ入れ、その上に燃えやすい小枝を並べる。更にその上に火付きのよい白樺を載せて火をつける。白樺が燃え始めたらナラやカエデの薪を入れる。堅木に火がつくと勢いよく燃え上がる。しかし時々手抜きをして失敗することもある。ストーブの窓から赤い炎を見ていると

急に薪切、薪割、薪運びの重労働を思い出す。

初冬は寒い。ストーブの窓から赤い炎を見ていると身体も心も温まり幸せな気持ちになる。炎は神に通ずるものがあると思う。

１２月になるとストーブを囲んで女房と二人でクリスマスの唄を歌う。正月には山の仲間が集まり、山の唄を歌う。

「静かな夜更けに、囲炉裏のそばで、思い出すのはお前のこと・・・・」と燃える赤い炎を見ながら歌うと若き学生時代にかえり嬉しくなる。

１ヶ月ほど燃やすとストーブに灰が溜まる。木灰は桜の木の周りと庭木にまき、花が良く咲くように願う。まさに花咲爺さんである。更に煙突掃除も同時に行う。

薪ストーブは老人にとって大きなオモチャである。燃え具合は薪の材質により火力が異なり、暖かさもちがう。ストーブの灰の量、煙筒のつまり具合により燃え方が異なるのが面白い。ストーブの取扱いは奥深いものがある。

子供の頃、ストーブの上でリンゴを焼いた。リンゴはストーブの上で踊り出す。美味しく焼けたリンゴを兄弟で分け合って食べたことなど昔のことを思い出す。

ストーブの暖かさは、山を共に登った古い友、山で亡くなった仲間たちの顔、懐かしい唄も思い出させてくれる魔法の道具でもある。ストーブの燃える炎は過去を思い出すばかりでなく、時々ビジョンも与えてくれる。ストーブに感謝。

（カット：中村好至惠）

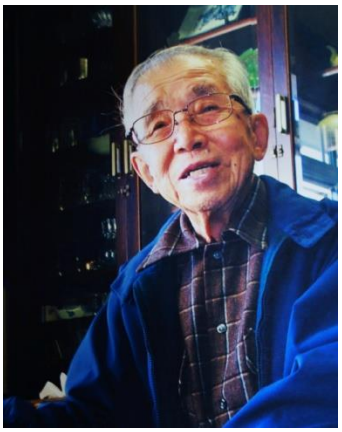
中村純二さんへの想い

小泉　義彦

中村純二さんが１０月２１日に９７歳の天命を全うされた。葬儀の前日にご遺体の安置されている調布メモリードホールでお別れをしてきた。１２年余のお付き合いであったが、ご自宅が近いのでよくお尋ねして山の話をし、写真を見させていただいた。また山岳会でお話しするための資料作りにも協力し、我が家にも校正のため奥さまのあやさんとよくお出でになられた。

2015 年 10 月 15 日の緑爽会講演会では、『緑への想い』という題名でお話いただいた。「緑爽会の源流的だった自然保護委員会の思い出話」として、「日本山岳会に入会したとき、同時に自然保護委員会に入れていただいた」、「大台ケ原林道建設反対運動、祖母・傾の林道問題での現地視察や集会を開いたり、また、科学委員会と協力して山のトイレ問題を取り上げたりした」、「役員を命じられてからも、イヌワシ問題などの自然保護に関心は持ち続けていた」、「山好き仲間の自由なクラブであった往時の日本山岳会に入会し、自然保護委員など務めて中高年になった私どもや緑爽会員は、自然保護に関する限り、より広いナチュラリストの立場に立って、今後も自然と交流し、互いに自

然を楽しむことができればと期待している」と述べられた。また「木の芽草の芽」＜第 55 号＞(2005.3.5)に『自然保護委員会と環境』について述べられカットをあやさんが描いている。



中村純二さんを語るに沼津かもしかアルパインクラブの加田勝利さん、日本山岳文化学会の田中文夫さんが欠かせない。田中文夫さんは後述する。加田さんとは中村ご夫妻、私ともそれぞれ山中で知り合った。2008 年 5 月 5 日に加田さんの「かもしか小屋創立 30 周年パーティ」で中村ご夫妻がいて、私もいた。帰り道が同じ方向だったので車中山好き同士の話が合いそれからお付き合いさていただいている。加田さんとは南アルプス山中で知り合い、30 年のお付き合いと聞く。加田さん、中村ご夫妻の山行にも何度か参加させていただいた。その中で、思い出深い山行に遠州の京丸山(1469m)がある。南北朝時代（1420 年頃)、敗れた南朝の後醍醐天皇の第四子宗良親王は南ア深南部に逃れ、親王亡きあと家来衆は辺境僻地の京丸部落に住みついた。20 数軒あったという家も、長であった藤原家一軒だけが現存するが。19 代当主の藤原真氏は春野町気田に移住して住む人はいない。加田さんは藤原真氏と交流があり、好意で無人の藤原家に泊めていただいた。茅葺の重厚な広い部屋は火を燃す煙で充満したが貴重な一夜であった。静かすぎるほどの一夜が明けた翌日に春浅い京丸山に登った。林道から熊笹の山道に入るがよく踏まれた道である。途中の鞍部は 2 ヶ所両側が切れていて、木の根に掴まって歩く。30 分ほどで雑木の疎林が美しい山頂であった。中村ご夫妻も満足されていた。

田中文夫さんは、日本山岳文化学会・会員有志代表幹事として丹沢山麓の大倉にある神奈川県立秦野戸川公園内のパークセンターでチューリップの盛んな頃に、また水無川の作治小屋で中村さんをメインとする講演会を幾度か開催している。田中さんは生誕地の平塚市第四之宮の歴史から日本文明、世界文明への道を解析し、文明と文化の違いを持ち前の技術者の立場から鋭く分析した著作物を何冊か発表している。その中で『複雑学　日本文明物語＆哲学』は師と仰ぐ中村さんからアドバイスを受けて完成し、中村さんが希望された英文対訳が 91%まで進んだが、健在中に完成できなかった。しかしご希望を違えず、まもなく完了させて世界へと発信できるように努力したい、とのことである。半世紀以上前のヒマラヤ遭難から山は遠ざかっていたが、2013 年 9 月から毎週末に表丹沢歩きを復活し、その報告と中村さんの近況を日本山岳文化学会丹沢有志、山岳文化講座参加者および丹沢で出会った方々90 余名に BCC 発信している。また、ふた月に一度位、デパートランチと近江八幡（中村さんの出身地）の和菓子をご自宅に持参して中村ご夫妻とのランチミーティングを楽しんだ、とのことだ。

LEX 友の会という山の好きな仲間で作った同好会の行事にも幾度かお二人で参加いただいた。大田区の西堀榮三郎宅で南極のお話や、仲間の小淵沢山荘でのお話、一緒にハイキングなどを楽しんだ。早朝に編笠山の中腹にある展望台に出かけて鳳凰、北岳、甲斐駒、鋸と続く山並みに見入り、日向山からの八ヶ岳の大展望を楽しみ、青木鉱泉からの甘利山では雪の季節にお子さん連れで来て難渋したことなど話された。西堀宅を去るときに「放浪の歌」を歌うが、仲間の女性は誰もピアノの伴奏ができない、奥さまのあやさんのお陰で無事閉められた。

ご夫妻は、毎年 3 ヶ月ほどヨーロッパの山、もしくは 1 ヶ月は北海道・東北の山に出かける。LEX

友の会は北海道の天塩岳に登り、中村ご夫妻と知床岳に行く予定があった。計画は知床岳周辺を熟知する赤平の友人渡辺洋さんにお願いした。登山口の無人の天塩岳ヒュッテに泊まった折、宿泊ノートに３日前のご夫妻の名前を見つけた。旭川空港での待ち合わせ後、羅臼の奥の民宿に泊まった。渡辺さんはサポート隊として初めて会う４人を同行していた。観音岩の崖を上がり、ハイマツの密集地帯を通過し、尾根上で陽がくれた。海上には国後・択捉島が近くに浮かぶ。テントで一夜を過ごし翌朝早く出た。渡辺さんのガイドで無事知床沼に着き、昼食後に沼の周りを一周した。沼からは知床岳は見えない。帰りも苦労して宿に帰った。中村さんは知床沼まで歩けたことに満足して、感謝の言葉を述べられた。中村ご夫妻は羅臼のバス停から大きなトランク、ザックと共にまた次の山に向かわれた。いい思い出である。後日、渡辺さんの案内で雨竜沼や、石狩の黄金山(739m)を歩いている。

中村さんの誕生日は９月 18 日である。３年前の５月にお会いした時に、「いよいよ今年は 95 になるよ」とおっしゃられた。それでは仲間でお祝いをと八ヶ岳山麓のロッジ山旅を予約し、緑爽会、LEX 友の会などから参加者を募った。緑爽会からは田邊壽さん他４人、日野春アルプ美術館に出展していた中村好至恵さんなど 16 名が参加した。ロッジのオーナーである長沢洋さん、奥さま、娘さんにも協力していただき、楽しい会合であった。寸前に数えの 95 歳であることに気がつかれ「金剛石婚を迎えた中村純二・あやさんを祝う会」に変更した。この時は、天女山(1529 m)を歩いた。

95 歳誕生祝いは、加田さんの手配で沼津三津浜の安田屋旅館に於いて８人で祝った。北海道の渡辺さんも駆けつけて女将も加わってこれまた楽しい会合であった。この時は発端丈山(408m)に上がったが、愛鷹山の上の富士山の頂きは残念ながら雲の中だった。

2013 年１月大病を克服され翌年６月には北海道・下北半島の旅を楽しみ、秋には海外旅行に出かけている。お二人とも好奇心や冒険心が旺盛でそれがパワーの原動力と思われ、飽くなき自然探求には敬服せざるを得ない。

上に書いたことはお付き合いしていただいたことの一部にすぎない。多くの手紙をいただき、山岳会や山岳文化学会での発表資料をまとめるための資料や写真が手もとにある。特に記憶に残っているのは、山岳会でのお話の後、出席者からの質問「先生はどうしてそんなに覚えているのですか」と。中村さんのお答え「自分で計画し、実行し、帰ってからまとめれば自ずから頭に残っている」。ここに何枚かの手書きの地図がある。色えんぴつで色づけされ、緯度経度も描かれ、ルートが赤ペンで入っている。旅行に行かれる前に描かれた物であろう。かなり詳細に描かれている。「ギリシャの聖山を訪ねて 2008」「南西諸島の旅 2009」「ウクライナ・ポーランド 2011」「北海道・下北半島 2012」「ポルトガル 2015」など。２階の書斎で描いている中村さんの姿が目に浮かぶ。また書斎に置いてあった南極から 60 年前に持ち帰ったアデリペンギンと盗賊カモメの剥製が葬儀場に置かれ遺影と棺を見守っていた。

葬儀のあと中村家を訪ねた際、玄間横と庭にあるブナの葉が色づいており、間もなくすべて散ってしまう。春になればまた新芽がふき、初夏には沢山の緑の葉を付ける。純二さんが白神から苗を持ち帰ったものだと奥さまから聞く。ブナ（橅）は木で無いと書く、これから主人を見ることのない木たちも寂しがるに違いない。　　（写真提供：小泉義彦）

地名の変更に摩訶不思議な実例

五十嶋　一晃

国土地理院の地形図に記されている自然地名は、現在では地元自治体から「地名調書」を国土地理院へ申請し、国土地理院では「現地現称の原則」に基づいて地元自治体の申請を唯一の拠り所として地形図に表記している。ただし、国土地理院では地元自治体での申請理由や内容は問わない。地元自治体から申請がなければ地形図に記載されず、改名の場合も申請がなければ旧地名が残ったままである。また、境界の地名は、自治体によって表記や呼び名が異なっている場合がある。このような場合は、国土地理院では再度関係自治体に照会して確認しているが、地名の存在する土地を一部でも有している地元自治体は、すべて合意することが必須条件となっている。ゆえに古名と新名の山名を含め「一山複数名」が生じ、地形図には（　）で別名を表記している。以上のシステムで地形図に地名が記され変更し削除される。

ところが私が調査したなかで摩訶不思議な実例があり、その地名が市民権を得て現在では全く疑問もなく使用されている。今後、地名について疑問が生じた場合の参考として報告する。

新潟県と群馬県の県境に谷川連峰があり、その連峰の万太郎山と仙ノ倉山の間の北面を流れている現在の名でいえば「毛渡沢」（下線は私が引く。以下同じ）がある。この毛渡沢は以前は「毛度澤」であった。国土地理院の図歴は次のとおり。なお地元自治体が「地名調書」に記す地名の「ふりがな」は必須になっている。

◆５万分１地形図（図名は年次により変更あり）では

・１９１４（大正３）年、初めて発行された地形図には「毛度澤」（図名「湯澤）と表記し、「けどざわ」と呼ぶ。

・１９５８（昭和３３）年発行から「毛度沢」（図名「越後湯沢」）、「けどざわ」となる。

・１９６１（昭和３６）年発行から「毛渡沢」（図名「越後湯沢」）、「ふりがな」は昭和４０年代に「けどざわ」と申請されている（国土地理院の説明）。

◆２万５千分１地形図では

図名「土樽」と「三国峠」に記載があり、両図とも１９７４（昭和４９）年の最初の発行から「毛渡沢」と表記されている。

＊

２０２０（令和２）年９月に、新潟県の湯沢町へ、毛度澤が毛渡沢へ地名変更した経緯および表記が変っても「けどざわ」というフリガナが変っていないことについて問い合わせた。その経緯の要点は次のとおり。

湯沢町担当者の説明では、「毛渡沢」という地名の変更について

国土地理院からの照会文書が発出されたと推定出来得るのが昭和 33 年と思われます。残念ながら、当方の書類の保存年限を大幅に超過していることもあり、関連文書を探し出すことが出来ませんでした。ついては、誠に申し訳ございませんが、お問い合わせ頂いた件について、お答えすることが出来ないのが現状です。

あくまでも参考として申し上げさせて戴きますが、私個人は、毛渡沢について、名称が変更となったという話を耳にしたことはございません。当該箇所には昭和６年竣工の土木遺産に指定されている毛渡沢橋梁がありますが、表記には“毛渡沢”となっています。もう一度国土地理院の方にお問い合わせ頂く等、別の方策をご検討を頂ければ幸いです。

との説明をメールで受けた。湯沢町担当者の個人的なこととして述べている見解と、私が体験していることは真逆である。私の認識は「毛度澤（けどさわ)」のみであり、最近の登山記から「毛渡沢」という表記があったので、国土地理院へ問い合わせ変更があったことを確認した次第である。

もっとも筆者が谷川連峰へよく入山していたのは、１９５４（昭和２９）年～１９５７（昭和３２）年で、毎年５月に一ノ倉出合でテントを張り１週間の定着合宿とその後、上越国境の縦走を行なっていた。つまり、１９６１（昭和３６）年に地形図が「毛度沢」から「毛渡沢」に変更になる前の谷川行きであった。

そこで湯沢町の担当者へ説明をいただいた「お礼と」「再度のお尋ね」をした。それには参考の一つとして１９３１（昭和６）年８月、大村書店発行　角田吉夫著『上越國境』の中に掲載のある毛度澤の「写真」「写真説明」「谷川岳・仙ノ倉山附近概念圖」の該当部分をＰＤＦで送った。そして角田吉夫は法政大学山岳部出身で私の先輩であること、当時、日本山岳会幹事として上越国境の相談役であったことを説明し、当時の資料のすべてが「毛度澤」であることを知らせる。

同時に角田吉夫が中心となって建設した法政大学山岳部の山小屋についての説明を加えた。つまり１９２９（昭和４）年１０月に毛度澤の奥に７～８人収容できる炭焼小屋程度の笹小屋を建て、１９３１（昭和６）年１１月に土樽村の山案内人・剱持政吉の献身的な努力によって２０人収容、建坪７坪半、平屋トタン葺、ベッド上下２段、便所別棟半坪の毛度澤小屋を建設した。その後、法大山岳部は上越国境の開拓目的を終え、１９３６（昭和１１）年に建設当時多大な助力と犠牲を払っていただいた湯沢村上越国境山岳会を通し越後湯沢郷土研究会へ譲渡したことなどを述べ、その証として日本山岳会の会報『山』ＮＯ．１０（１９３１・昭和６年１１月刊）および 『山岳』第２７年第２号（１９３２・昭和７年９月刊）の山小屋の写真が入った建設記事をＰＤＦで送った。　山小屋は、その後雪崩によって崩壊している。

「再度のお尋ねとお願い」は、【昭和６年竣工の土木遺産に指定されている毛渡沢橋梁にかかわる資料】を求めた。

それに対する返信として【あくまでもこちらの個人的見解です。地元民はそういうことを耳にしたことがないということに過ぎません。毛渡沢橋梁の件ですが、こちらの一般的な資料等のお話であり、歴史的文献等ではございません。こちらとしても、文献等は一切ございませんので、正直のところこれ以上のことはお答え出来得るものがありません】。「地元民はそういうことを耳にしたことがない」という担当者個人の認識に地元民の見解が加わった程度で、問題の深奥に迫る情報は何ら得られない。

その後、湯沢町とは呼び名などで３回の往復メールを行なった。しかし、地名変更の理由や根拠を見出すことができず、最終的に私から「当時（昭和４０年代）の資料は、保存年限が超過しているため残っていないこと。湯沢町町長から国土地理院院長宛て「地名調書」の申請がなされ、国土地理院発行の地形図も変更が成されていたことなどを往復文書を要約して、私が現在起稿している文献に載せる」ことのメールを送ったが、その後、全く返信がなくなった。

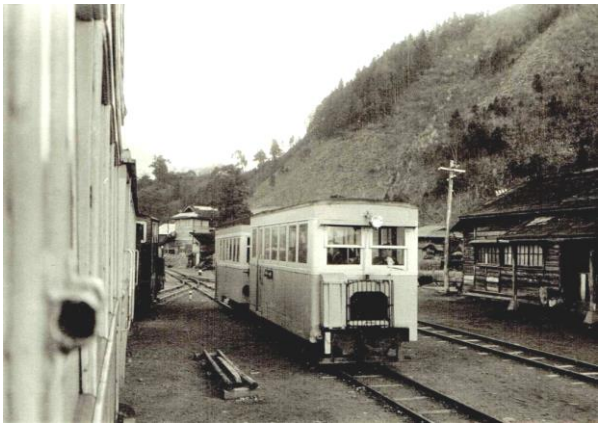
湯沢町へ問い合わせた最初の頃に、電話で、筆者の見解を調査した結果を基にして率直に述べたことがある。その内容は、湯沢町の当時の担当者が「度」を「渡」に表記を間違え、フリガナは「けどざわ」のまま継承し、それが現在でも使われ、市民権を得て定着したと推定される、という趣旨である。この電話を受けた湯沢町の地名担当以外の職員は、沈黙のみで特に見解を示すことはなかった。

火鉢列車で安達太良山へ

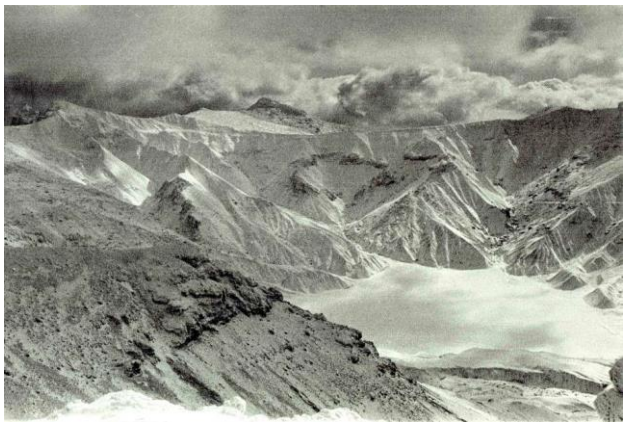
夏原 寿一

火鉢にあたりながら

オープンデッキのある客車(左奥は赤埴山)



川桁駅で



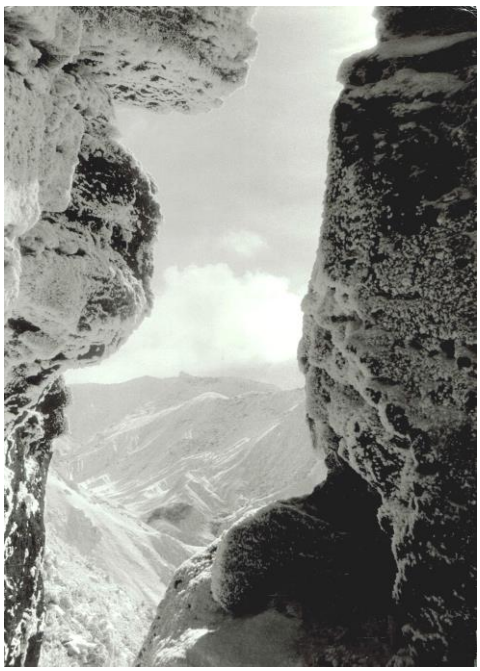
中央奥の▲が頂上(右下は火口・沼ノ平)

1958年の12月の初め、友人と3人で安達太良山に行った。西麓の沼尻温泉から入り、東麓の岳温泉へ下る計画だが、目的の半分は、その麓を走る火鉢列車に乗ることだった。

当時、沼尻には日本硫黄という会社があって、沼ノ平付近で採掘した硫黄を索道で沼尻に運び、そこから「沼尻軽便鉄道」で国鉄・磐越西線の川桁駅に運んでいた。その軽便鉄道は、湯治客やスキー客、沿線の人々の足としても活躍していた。客車は2両連結で、小さなジーゼル機関車が牽引していたが、機関車と客車の間に硫黄積載用の貨車を2〜3両連結する編成もあるとのことだった。

冬季、その客車内には鉄板で作った長火鉢があって、車内は窓ガラスが曇るほど暖かかった。川桁から終点の沼尻まで、15km余りを約50分、左側の車窓に会津磐梯山を眺めながら田畑や人家の間を抜けて次第に山の中に入っていく、そんな路線だった。

硫黄の運搬が主な役割だったこの軽便鉄道は、硫黄鉱山が1968年に閉山になったことに伴い、翌1969年に廃線となった。



胎内岩の登りで（遠くに船明神山）

８５ヶ月連続の山行

瀬戸　英隆

本年１２月１日、今年初めての三沢峠頂上に立った。思えばずいぶん長い月日が過ぎていた。前回登ったのは、やはり１２月だったが２年前だ。

高尾近郊にはよく行くものの、高尾山はあまりに人が多く敬遠している。この南高尾がいい。登山者も少く、標高のわりに登り甲斐があるからだ。しかし、この日は何となく身体がだるく、何か疲労感があるのを感じていた。最近どうも体調が良くない。年齢の故だと自らに言い聞かせているものの、何か納得がいかないが、この山なら慣れているし、大丈夫だろうと考えての事だった。

駅から登山口まで単調な舗装道路を行く。いつもなら３０分くらいで着くのに、今日は４０分を費やした。少し早いが、おにぎりを立ったまま食べる。ただしひとつ。さて登りだ。頂上まで一気に行く。他に登山者はいない。峠着１１時４５分。ベンチに独り座って残りのおにぎりを一つ食べる、もう一つは非常用として残す。水を飲んで出発。このころから登山者によく会うようになったが、何れも逆コースだ。このコースはアップダウンが大きく、よく来るなあと思う。それからは全く休まず高尾駅入口の民家のところまで来た。やった！ と思う。この程度の低山でそう感じるのはやはり年齢をとったのだと自覚する。そして来年も出来るところまで記録を伸ばそうと思う。今回で８５ヶ月連続登山となり、己の年齢と同じだ。来年は８６歳となる。８６ヶ月連続から更にどのくらい伸ばせるか、毎日のトレーニングが重要だ。

冬の青空がとても美しかった。山はいつ来てもいい。

～～《メッセージ》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

年末のご挨拶

代表　富澤　克禮

新型コロナウイルスは、収束に向かうどころか、第３波に入って医療崩壊の危機に直面している厳しい状況が続いておりますが、緑爽会の会員の皆様におかれましては、お元気でお過ごしのことと推察いたします。

創立２５周年という記念の年が、コロナ禍によりこのような状況で、皆様と直接お会いできる機会が、大幅に少なくなったことはまことに残念です。しかし、このような厳しい環境の中、１０月２４日の創立２５周年記念講演会と９月、１１月の二つの山行を開催することができました。

特に、今年の最大の事業と位置づけておりました創立２５周年記念事業の講演会を盛会のうちに、無事終了できましたことを嬉しく思います。コロナ禍のため、会場から義務付けられておりました参加者名簿の保存期間の１ヶ月が無事経過したときは、正直ホッとしました。

今回の講演会は、巻頭の記念講演会報告でも触れておりますように、いくつかの幸運にも恵まれまして、当初予定していたよりも広い会場で、一般の方にも呼びかけ、多くの方に参加していただき、素晴らしい講演会になりました。

これも、快く講師を引き受けていただきました神﨑忠男会員をはじめ、コロナ禍という制約がある中、講演会を成功させるため、チームワーク良く、それぞれの持ち味を発揮して得意分野で活躍いただいた幹事及び担当者の皆様のお陰です。ここに改めて、厚く御礼申し上げます。

新しい年には、一日も早く、コロナとの共存の道が示され、普通の日常生活に戻り、皆様と元気にお会い出来ることを念じております。健康第一にお過ごし下さいますようお願い致します。

～～《予告など》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

１月山行　初詣山行「高尾山八十八大師巡り―その２　結願」
９月の八十八大師巡りで回り切れなかった七十六番以降八十七番までを巡り、薬王院で巡拝証を受けます。もちろん初詣が主旨であり、前回参加できなかった方もご参加いただけます。
運が良ければ山頂付近で「シモバシラ」が見られるかもしれません。

期　日：２０２１年1月８日（金）
集　合：JR 高尾駅北口に９時
コース：高尾駅北口→落合→金毘羅台→１号路→薬王院→高尾山頂→
　　３号路・１号路で下山
　　ケーブルでの下山もできます。歩行時間：休憩込み約５時間
担　当：CL 荒井正人　SL 小林敏博
申　込：**1月４日（月）**までに荒井へ
※寒さが厳しくなっています。直前に降雪があった時は軽アイゼンが必要となるかもしれません。
　当日の天気予報が思わしくないときも含め、連絡を入れるようにします。

２月例会については、芳賀孝郎会員にお話をいただく方向で考えていますが、コロナの感染状況により、３月開催となることもありうること、そのため開催時期によっては２月発行の会報では連絡が間に合わず、メール・ファックスなど他の手段とならざるを得ないことをお含みおき願います。
４月の総会についても、４月１７日（土曜）に予定していますが、これもその時の状況によっては本年度同様、書面での審議となることも考えられます。事情ご賢察のほどお願いいたします。

会費納入の件：２０２０年も終わります。会費未納の会員は、以下の口座へ会費＜１５００円＞を「振込」にて納入していただくようお願いいたします。

・ゆうちょ銀行からの振り込み　　１００００－１８５３９０４１　「リョクソウカイ」
・他の金融機関からの振り込み　　　００８- １８５３９０４　　「リョクソウカイ」
※他の金融機関からの場合「支店名」は「ゼロゼロハチ」と入力してください。

会員異動（新入会員）　２５周年記念講演会報告でも触れましたが、下記の通り入会がありました。
・近藤 裕（７９８７）
・竹中 彰（１２９８１）

・松川 征夫（１５３６３）

・有岡 純子（１５３６１）

--- **編集後記** ---
何度も書くので嫌になってしまいますが、コロナ感染者数の増え方が異常です。何はともあれ、人に迷惑をかけないようにしつつ自分は自分で守りましょう。普通に暮らせることがいかに幸せなことかと、誰もが感じていることと思います。そんな中での、今年の最終号は20ページとなりました。
良いお年をお迎えください。来年もよろしくお願いいたします。（荒井正人）
次号予告＜2月25日発行の主な内容＞1月山行報告、芳賀さんの随想その他
皆様からの投稿をお待ちしています。